

太宗が即位当時はヌルハチにならつて皇帝と称していた事実を証明している。しかし間もなく袁崇煥からの抗議により、話し合いで帝号を降して汗と称することとなつたのである。したがつて再び皇帝と称するのは、崇徳建元になつてからのことである。

以上、五編の論文について紹介してきたが、いずれも相互にきわめて密接な関係にあり、あわせて読む必要がある。なお、このほか「論満文 *nikan* 這個字的含義」、「明史纂誤再統」の二編が収載されている。

(中央研究院「歴史語言研究所集刊」第三十七本下冊、台北、中華民國五六年六月、四二—五七五頁。)

第五世ノヤン・フトクト・ラブジャイ著

ダムディンスルン編

## 月のカッコウの伝記

岡田英弘

これはモンゴル人民共和国科学アカデミーの言語文学研究所から出ている叢書コルプス・スクリプトールム・モンゴロールの第十二巻として、一九六二年ウラーンバートルから

刊行されたもので、いささか新刊と言うにはふさわしくないが、まだ紹介する人がないようであるからここに記す。

「月のカッコウの伝記(Saran kokögen-ü namtar)」というのは、モンゴル文学には珍らしい戯曲である。もちろん現在のモンゴルでは、ロシアの影響で芝居が盛んに演ぜられている。しかし一九二二年の人民革命以前にも、すでにモンゴルに芝居があつたことは従来知られていなかった事実である。

本書は二六〇ページの本文に正誤表二ページが附されている。その本文の最初の四十六ページは、ダムディンスルン(Dandisüring) オヨム(Oyun) ヲムフ(Möngke) 三氏による詳細な解説で、その内容はすばらしい歴史学の業績と言へべきものである。あとでくわしく紹介する。

解説のつぎの二ページは白紙で、次の第四十九〜六十七の十九ページは「月のカッコウの伝記のユリム(Saran kokögen-ü namtar-un yorim)」と題されている。ユリムはチベット語の *go rim* であつて、「次第」を意味するが、このユリムは、この長篇の戯曲の梗概に詳細なト書きを附したもので、本文とあいまつて実際の舞台上の動きをうかがわせる。ユリムの編者として名を列しているのは、第七世ノヤン・フトクト(Doloduyar duri-yin Noyan qutuytu)、トイン・カンボヤフ(Toyin gambu blam-a) 議政扎薩克多羅郡王 (kebei Jasay körs-yin giyün wang)、輔国公阿哥(ulu-tur tusalayci

age giing) のひであり、日付けは光緒二十八年壬寅正月(1902)となつてゐる。

第七十三ページ以下がいよいよ第五世ノヤン・ノトクト・ラブジャイの手に成るこの戯曲のテキストで、全篇九章(Dehne)に分れ、せりふはモンゴル語であるが、随所で唱えられる経文や真言などはすべてチベット語である。

それでは最初にかえて、ダムディンスルン氏の解説の内容を紹介しよう。

この戯曲の筋は、チベット語の韻文物語「青項月因縁 (Byang chub kyi sens mnga' bai bya mgin srgon zla bai rtogs pa brijod pa 'khor ba mtha' dag la snying po med par mhong ba nams kyi rna rgyan)」に於て述べてゐる。(註)原作者は第十二世タクブ・リンポチェ・ロサンテンノキョムツェン (Stag phu rin po che Blo bzang bstan pa'i rgyal mshan) にあつて、その古いこの説話のテキストによつて乾隆二十二年丁巳(1737)に著わした。内容は、クララーシヤ(Külaraia)王の子の法喜(Nom-un bayasqiang)が近臣のラガナ(Lagana)と共に、他の動物の身に靈魂を入れる術を習ひ、ある日花園の中でふたりともカッコウに変身する。ところが悪心をいだいたラガナは先にもどつて王子の身にもぐりこみ、自分の体を河にすてて王城にもどり、首尾よく王位を手に入れる。帰り場所を失つた王子はカッコウの

姿のまま鳥獣に法を説いて時をすこす。一方、王城では王子になりすましたラガナが虐政を布いていたが、そのうちにカッコウ王子の友の具光(Tegus getshü)が逆臣の魂をおい出して自ら王子の体にはいり、国政を革めて民を救う。以上の筋のあいまいまに仏法の教訓が説かれているが、美しい韻文のため大いにもはやされて、チベットでもすでに劇化されていた。

この物語は乾隆三十五年庚寅(1770)、七十一歳の大国師ヴァーギンドラ・シヤールサナ・ヴァールタ (Vagindra sasana varta) すなわちシリーン・ゴル盟アムガナル左翼旗のガワンツェン(Ngag dbang bstan 'phel) にあつて、「月のカッコウの物語 (Saran kökogen-i turyui)」と題してチンギス語訳された。この大国師はテンギェル (Bstan 'gyur) の翻譯や「諸賢出地 (Merged Yargu-yin oron)」の編纂に參加したほか、多くの著作のある大学者であり詩人であつた。

「月のカッコウの物語」の訳文も流麗で大いに喜ばれ、たちまち刊行されたし、ブリヤート版も出て、これを誦せぬモンゴル人はないとまで言われた。

この物語にもとづいて作られたのが戯曲「月のカッコウの伝記」である。テキストが発見されたのは一九五九年、外国からの客人を案内してダムディンスルン氏がウラーンバートルのガンダン寺を訪れた際、寺の書庫においてであつた。し

かし完本ではなかつたので、ノヤン・フトクトの故郷ゴビ省出身の古老をもとめて市中の家々を歴訪した。その結果、欠巻を補うことは出来なかつたが、東ゴビ省に行けば入手の可能性があることが判つたので、先ずオヨン研究員が派遣されて探訪をはじめた。

翌一九六〇年の四月、ダムディンスルン氏自ら搜索にのり出し、筆舌につくしがたい困苦のすえ、やつと目的の欠巻を得て、はじめて完本が成つたという。

このときのエピソードとして、氏が記している話は面白い。ある古老が「伝記」を一部所蔵していたことを聞き、その所在をたずねたところが、数年前に死去したという。しかし死の一年前、蔵書二箱を砂中に埋めたという話で、当時十三歳だったその娘だけがその時手伝つたということだったから、その婦人と応援の学生や労働者たちとトラックに乗り、七十料の悪路をふつとばして現場に向つた。着いたのは午後三時であつたが、直ちに婦人の指示する箇所を発掘をはじめた。全員交代で必死に掘りつづけ、夜九時にやめ、翌朝六時から午後一時まで掘りまくつたが何も出ない。モンゴル家屋がすつぽり入るほどの大穴が出来て、みな疲れはててしまつた。ところが一人の智慧のある老人が細い鉄棒を砂上に突き立てながらそこら歩き廻つたところが、一箇所だけやすやすとめりこむところがあり、そこを掘つたら求める二つの箱

が現れたという。しかし箱の中の書物には、「伝記」は含まれてなかつたそうである。

書物の搜索だけでなく、ダムディンスルン氏らは著者ノヤン・フトクトに関する情報を集めることにも力を注いだ。ノヤン・フトクトは多くの恋愛詩の作者としても有名であつてその作品を暗誦しうる古老はまだ生存している。同氏らはこの人々から詩句を聞き出しては書き留めて行つた。こうして忘却の淵から救われた作品の一部が、この解説には掲げられている。

ダムディンスルン氏の筆は、一転して作者の生涯の考証にうつる。第五世ノヤン・フトクトは、名をダンジン・ラブジャイ(Danjin rabjai/Bsan 'dahn rah rgyas)といい、嘉慶八年(1803)十一月二十五日の誕生である。父はドルドイト(Dulduyit)という貧しいドルベット人で、シリーン・ゴル盟のソニット左翼旗に流れて来てそこで結婚し、妻と共に外モンゴルの今の東ゴビ省のメルゲン王旗の地に至つたとき、ラブジャイが生まれた。母は早く死に、ラブジャイが五歳になつた嘉慶十二年、大飢饉が襲来した。父はただ一頭しかない馬に幼いラブジャイをのせ、食を乞うて流浪した。十四年、七歳のラブジャイはオンギーン川の活仏ジソドニルンドブ(Jisodnihundub)の門に入つたが、その聡慧はたちまち人々の注目をあつめ、翌年、八歳にして迎えられて第五世ノヤ

ン・フトクトの位についた。

これより先、第四世ノヤン・フトクトはジャムヤンオイド  
ブジャムツォ(Jamyang 'oyidubantso)といつたが、エルデ  
ヒ・ジョー寺の鼠害を祓う祈禱会に参加しており、泥酔して  
ラー・ロブサンダンジン(Lobsangdanjin)を殺し、シナの  
獄中で死んだ。清朝はこの不祥事にかんがみ、特に勅令をも  
つてノヤン・フトクトの転生を禁止した。しかし第四世の弟  
子たちは、ナワン・アクランバ・チョルジ(Nawang agramba  
chöri) (Ngag dhang sngags ram pa chos rje) の転生と偽  
つてラブジャイを迎立したのである。

嘉慶十七年、十歳になつたラブジャイは第四世ジェブツン  
ダンプ・フトクトとアキヤ・ゲゲンの門に入つて法を聴  
き、道光三年、二十一歳のときにはチャンキヤ・フトクトの  
弟子となつて五台山への巡礼に随行した。

道光五年、ラブジャイは二人の妻と共にチャンキヤ・フト  
クトに謁した。このころのチャンキヤは紅教を重視していた  
ので、ラブジャイもそれに従つたのであるという。

ラブジャイは幼時から詩作にふけり、演劇に興味をもつて  
いた。すでに嘉慶二十年には時輪学部デレンキョクの創立を機に大いにチ  
ヤム(Chan 跳舞)をもよおし、道光十年には、未来の世に  
理想郷シャンバラから出現して法敵を破る軍勢のさまを歌劇  
にして演じたのであるが、翌十一年、二十九歳のときにはい

よいよ「月のカッコウの物語」の劇化にとりかかった。これ  
は彼がアラシャンに滞在していた間のことであつたが、一方  
では領民に命を伝えて劇場ゲキヤを用意させた。その間に彼は青海  
に行つてチベット劇を視察し、領地からよびよせた弟子たち  
を訓練して翌道光十二年(1832)、アラシャンのバルーン・ヒ  
ート(Barayun keyid)寺において「月のカッコウの伝記」  
をはじめ上演した。これは翻案とはいえ、モンゴル人が書  
き、作曲した劇がモンゴル人の俳優によつて上演された最初  
で、まことに記念すべき事件であつた。

もつとも彼が書いたのはこの「伝記」だけではなく、ほか  
に「仏陀伝」・「ミラレパ伝」・「アティーシャ伝」の三作  
があり、これからはよく四つ一所に上演されたようである。

アラシャンから帰つたラブジャイは、イハ・フレエ(ウラ  
インバートル)とチエチェン・ハーン部を訪れた後、自領の  
トルガト寺(Tulga-tu keyid)に新築された劇場におい  
て、自作の劇の上演をはじめ、大群衆が集まつて見物した。  
今サイン・シャンダの西方約十軒のハールガイン・オーラ  
(Qayalyin ayula)山中のチョイリン・ポート(Coyling  
keyid)寺が、この常設劇場のあつた所と言ふ伝をされる。

そのうちにも時勢は変転しつゝあつた。咸豊二年、五十歳  
のラブジャイは、トシエート・ハーン部、チエチェン・ハ  
ーン部の王公の依頼を受けて、太平天国の乱を祓う祈禱をとり

行つたという。それから四年後、咸豊六年(1856)、五十四歳でラブジャイは入寂した。

今も語り伝えられるところによれば、第五世ノヤン・フトクトの死は自然なものではなかつた。実はメルゲン郡王ダクダンドルジ(Darandorji)の未亡人シムヌ・アバイ・エーシ(Simnu abai ai)を酔に乗じて罵り、その怨恨を買つて毒殺されたものだそうである。

一九六〇年の調査で、テキストの搜索と並行してダムディンスルン氏らが力を入れたのは、ノヤン・フトクトの作品に出演したり、上演を見た記憶のある古老からの聞きとりであつた。その成果は、解説の中に九人のインフォーマントの名をかかけて記録されているから、面白い箇条をひろつて見よう。

「月のカッコウ」が上演されたのは、前述のサイン・シャンドの近くの劇場だけではなく、ホーチット、ソニット、チャハル、その他の各地にノヤン・フトクトの劇団は招かれて出演した。団員にはラマもあれば庶民もあり、男女混演であつた。メルゲン郡王がクララージャ王の役を演じたこともあつたという。

出演者には特にギャラは出なかつたが、勸進元から纏頭を贈つて分配したという。衣装はシナ風でもチベット風でもなく、チャムの衣装に似ていた。顔にはくまどりをしたらし

い。

劇にはせりふは少なく歌が多かつた。歌い手は大きな台の上に置いてある脚本を見ながら歌うのであるが、台本は見物からは見えないようになっていた。歌のほかは踊りもあつた。また幕あいにはこつけない狂言もはさまれていた。

いつも数千人の観衆が集まり、十七日間ぶつ通しで朝の八時ごろから開演し、日暮れともに終演するのであつた。

劇場の構造は、一方が開いた二階建の泥屋で、これが舞台である。舞台の前には幕を引くようになっていた。舞台の両手にはそれぞれ出入口があり、その他急に消えるための穴(すつぽん)があつた。

見物席のほうは、三つの大テントに王公、ラマ、その他身分のある人々が坐り、庶民は立ち見であつた。

小道具にもいろいろのくふうがあり、電光や降雹のさまも真に迫つていた。騎馬の人々が登場するところでは、二人の人が木製の馬の首と尻を持つて出るのであるが、一時に二三十人の騎士が舞台に現れることがあつたというから、その大きさがしのばれる。

ふわふわに類する装置もあつたらしく、法会の場面で五十余人の僧が出て、一人々々退場したあと、一人残つたラマは突然空中に浮び上つて消えたそうである。

歌もせりふも日常の口語モンゴル語ではなく、文語を用い

綴りに忠実に発音した。

「月のカッウウ」が演ぜられたのは、毎年季春三月のことで、「仏陀伝」「アティーシャ伝」などと合わせて一月ばかり、連日朝から晩まで続けられた。中でも観衆に強い印象を与えたのは、「アティーシャ伝」中に登場するランダルマ王であつたらしい。仏教迫害の場で、王が剣をふるうと赤い血が流るごとく見えたという。そのしかけはわからない。ラレン・ペルドルジエがランダルマ王を射ると、王はかくし持つた矢を胸に当てて倒れ、あたかも射貫かれたように背に矢尻が見えたそうである。ペルドルジエが黒馬を河に乗り入れると、見る見る色が白く変つた。その他いろいろの進歩した技巧を用い、モンゴル人たちを熱狂させたのである。

ダムディンスルン氏は、つぎにタクブ・リンポチェのチベット語原作、大國師ガワンテンペルのモンゴル語訳本、ノヤン・フトクトの戯曲の三つを比較して、どのようなアダプテーションがなされているかを究め、ノヤン・フトクトは極めて自由に原作に手を加えているが、大國師の訳文からいくらか詩句を採つたものと結論している。

最後に、氏はチェチェン・ハーン部ワイジエン王旗のアルタンオチルト寺 (Altanvirtu-yin keyid) で毎年正月十五日に演ぜられた、別系統の「ジモンアン・チュトバ」(Jong ang choba) というショーについて簡単にふれてゐる。

批評と紹介 岡田

以上がダムディンスルン氏の解説の要約であるが、東洋文庫の山口瑞鳳、ケツンサンポ、ソエナムギャツォ三氏の示教によると、チハットにはインド系のアチュラモ (A che lha mo) という劇が古くからあり、「青瑣月」もそのレパートリーの一つであり、また戯曲はふつう「伝記 (nman thar)」と呼ばれる。劇団には男女優とも参加する。仮面を用いず、顔にくまどりをすること、せりふが少なく歌が多いこと、踊りが入つていること、幕あい狂言があることなど、すべてノヤン・フトクトの劇団と共通である。しかし最大の相違点は、アチュラモは舞台を持たず、平地で演ずることであつて、ノヤン・フトクトはシナ劇からこの要素を取り入れたのである。

しかしシナ劇の舞台には幕がないし、その他我が歌舞伎を思わせるノヤン・フトクトの進歩した舞台装置や効果もない。こうした要素はやはりノヤン・フトクトの独創として、モンゴル文化が世界演劇史にはこつてよいものではあるまいか。

ダムディンスルン氏の解説に続いて掲載してある、オヨン、ムンフ両氏の解説の内容は重複した部分が多く、どうやら本来は別に出された報告書であつたのを、テキストの刊行に際して附録したらしく思われるので、ここでは触れない。紹介を終るに当つて一言感想をのべれば、「月のカッウウ

の伝記」のテキストの復原に払われたダムディンスルン氏らの努力のとうとを感ずるにあらざらば、ならに一段と価値多く感ぜられるのは、失われゆく記憶の保存のために、多くの古老から精力的に聞き取り調査を行ったことと、こうして生の資料の形のまま世界の学界に提供されたことである。こうした資料を通じて、十九世紀のモンゴル生活の一面が、思いがけなくあざやかな色彩を帯びて目に浮んで来るのに接して、何か歴史学こそさうあらねばならぬという感動をおぼえるのは私だけであらうか。

(Noyan Qutuqtu Rabjai: Saran-u Käkügen-u Namtar.

Ts. Dandinsiten beledkebe. Corpus Scriptorum Mongolorum Institutii Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongoli, Tomus XII. Shinjlekh Ulkhaan Akademii Khevel, Ulaanbatar, 1962.)

(註) Jacques Bacot, La Vie de Marpa le “Traducteur” suivie d'un chapitre de l'Avadana de l'Oiseau Nlaka-niha—extraits et résumés d'après l'édition xylographique tibétaine. Paris, 1937. (Buddhica, Première série: Mémoires—tome VII.) 山口瑞鳳氏の示教に感ずる。

ラビドス著

## 中世後期のイスラム都市

佐藤次高

(一)

これまでヨーロッパの都市は「自治的共同体」であり、アジアの都市は「官僚的に統治された都市」であると一般に信じられてきた。イスラム都市についても、そこに自治的要素を見出すことは出来ないと主張されてきた。しかし新進気鋭の著者はこうした比較による分析はもはや古い視角であると断じ、イスラム都市にも自治と公共のための自発的集會が存在したと考える。つまり研究は形態としての都市にではなく、生きた過程としての都市に重点を置き、さらに社会学の観点をこれに加えた方法をとうとする。したがって「はしがき」によれば、本書の目的は中世後期のイスラム都市の社会構造と政治過程を研究することであり、それは軍人階級と地方共同体との関係を研究することでもある。「序言」によつてこれを敷衍すれば、考察の範囲は靜態的な社会・経済構造や都市の政治機構に限られるべきではなく、都市の階層、内部集団、それらの公的役割と組織の性格、さらには集団内部の行動を特徴づける力まで分析の対象とされなければ